

初旅

寺田寅彦

青空文庫

幼い時に両親に連れられてした長短色々の旅は別として、自分で本当の意味での初旅をしたのは中学時代の後半、しかも日清戦争前であつたと思うから、たぶん明治二十六年の冬の休暇で、それも押詰まつた年の暮であつたと思う。自分よりは一つ年上の甥のRと二人で高知から室戸岬^{むろとぎさ}まで往復四、五日の遠足をした。その頃はもちろん自動車はおろか乗合馬車もなく、また沿岸汽船の交通もなかった。旅行の目的は、もしも運がよかつたら鯨を捕る光景が見られるというのと、もう一つは、自分の先祖のうちに一人室戸岬^{むろとぎさ}の東^{ひがし}寺^{でら}の住職になつた人があるのでその墓参りをして来るようにという父からの命をうけていたことである。

中学校にはまだ洋服の制服など無い頃であつた。中の字を星形にした徽章のついた制帽を冠つて、紺のめくらじまの袴をはき脚絆^{きやはん}に草鞋^{わらじ}がけ、それに久留米^{くろめがすり}紺の綿入羽織という出で立ちであつたと思う。そうして毛糸で編んだ恐ろしく大きな長い羽織の紐をつけていたと想像される。それがその頃の田舎の中学生のハイカラでシックでモダンな服装であつたからである。

第一日は物部川^{ものべがわ}を渡つて野市村^{のいち}の従姉の家で泊まつて、次の晩は加領郷^{かりようご}泊り、そう

して三晩目に室津の町に辿り付いたように思う。翌日は東寺に先祖の一海和尚の墓に参つて、室戸岬の荒涼で雄大な風景を眺めたり、昔この港の人柱になって切腹した義人の碑を讀んだりしたが、残念ながら鯨は滞在中遂に一匹もとれなくて、ただ珍しい恰好をして五色に彩色された鯨漁船を手帳にスケッチしたりしただけであつた。父は維新前いわゆる御お鯨方くじらかたの支配の下に行われた捕鯨の壯觀と、大漁後のバツカスの饗宴とを度々目撃し体験していたので、出発前にその話を飽きるほど聞かされていた。それで非常な期待と憧憬とをもつて出かけたのであつたが、運悪く漁がなくて浜は淋しいほど静かであつた。しかし今になって考えてみるとそのおかげでかえつて自分の頭の中には父の言葉で描かれた封建時代の捕鯨の光景がかなり鮮明な影像となつて四十年後の今日もまだ保存されているのである。

室津の宿屋の主人はかなりのお婆さんであつたが、われわれ二人の中学生の初旅を珍しがつて大変にもてなしてくれた上に「珍しいものを見せて上げよう」と云つて持出して来たのが一卷の絵巻物であつた。よほど貴重なものと見えて、内証で見せてやるといふ条件つきであつたような気がする。残念ながら詳しいことは覚えていないが、とにかくその巻物の中にはありとあらゆる鯨の種類それから親類筋のいるか、すなめりの類の精細な写生

図が羅列してあったのでわれわれ二人の中学生は眼を丸くしてそれを点検したばかりでなく、婆さんの許可を得たかどうかそこまでは覚ええないが、とにかく二人の写生帳の中へその主なるものを写しとつたのであった。この鯨絵巻の写しや、硯石で昔から知られた行^{ぎやう}当^{とう}岬^{さき}のスケッチや、祖先の出身だという一世二海和尚の墓の絵などが郷里の家に保存してあったはずであるが、いつの前にかもう無くなってしまったか、それともまだ倉の中のどこかに隠れているか不明である。

この鯨の絵巻物はおそらく昔の御鯨方に伝わった最貴重な伝書のようなものではなかったかと思う。この絵巻がそれから四十年の月日の間にどうい^{けみ}う運命を閲したか、もしかこの『旅と伝説』の読者のうちで、かの地に縁故のある人でもいて、この貴重な文献の所在をつきとめ、そうして、もしまだそうなっていないならば、それを永久に安全な場所に安置し、そうして特志者にはいつでも見られるようにするだけの面倒を見てくれるという事にでもなれば大変に仕合せだと思^びうのである。

尾籠^{びろう}な話であるが室戸の宿の宿泊料が十一銭であつたことを覚えている。大変に御馳走があつて二の膳付の豊富な晩食を食わされたのでいささか囊^{のうちゅう}中の懸念があつたではないかと思う。そのせいではつきりそれを覚えてい^るのかもしれない。道中の昼食は一人前

五、六銭であつたらしい。どこかの昼食で甥が一、二杯自分より多く飯をくつたら、その分だけ一銭多く取られた。会計は父の命令で自分の方でもつことになっていたので、甥がひどく悄^{しよげ}気^けで困ったことを思い出す。恥かしい内証話である。

室戸岬が日本何景かの一つになつてから観光客が急に多くなり、今では、汽車こそまだ開通しないが、自動車や汽船で楽に日帰りが出来るそうである。その代りもう十一銭の宿泊料では覺束ないであろう。鯨取りもとうにもうノルウェー式か何かになつてしまったはずだから、自分が父から聞いたような美しい勇ましい夢物語はやはり永久の夢物語になつてしまったに相違ない。

甥のRが死んでからもう二十余年になるので当時の想い出を話し合う相手もなくなつてしまつた訳である。従つてこの想い出には色々の思い違いがあることと思う。

（昭和九年八月『旅と伝説』）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第五巻」岩波書店

1985（昭和60）年12月5日第2刷発行

初出：「旅と伝説 第八十号」

1934（昭和9）年8月1日発行

※初出時の署名は「吉村冬彦」です。

入力：Nana ohbe

校正：川向直樹

2003年12月14日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

初旅

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>